



平成30年6月12日(火)
校長通心 No.40 校長 馬渡教三

バランス (相田みつを)

下の式を、私は「バランスの図式」と呼んでおります。人が何か仕事をするときの、心と技術との関係を【かけ算】の形で表したものです。私の持っている力を仮に10として、それを心と技術に分けます。私が筆を持つ時には、初めに心が動きます。つまり、感動です。しかし、感動だけでは形になりません。それを、具体的な形にするためには技術が必要です。心と技術を組み合わせたものが作品で、それが【かけ算】です。心と技術のバランスがとれた時、最高の25ができあがるわけですが、それは理想であって、現実には失敗の連続です。

心	×	技術	=	作品	
9	×	1	=	9	失敗
8	×	2	=	16	
7	×	3	=	21	
6	×	4	=	24	
5	×	5	=	25	成功
4	×	6	=	24	
3	×	7	=	21	
2	×	8	=	16	
1	×	9	=	9	失敗



夏季大会 = 武の車輪はMAXスピン そして 絆シャフトは市内一！

夏季大会まで5日となった。選手団は市内25校中8番目の入場行進。応援団は本部を時計の12時としたら7時の位置。選手団が競技場に入場しフィールドに入る手前の「絆軸」大応援旗のところで全校生徒の絆シャフトが輝くのを楽しみにしている!!そして、3年生にとっては最も結果にこだわりを持った大会になる。…なぜなら、3年生にとって、今まで積み上げてきたことを全て出し切る最後の「真剣勝負の場」になるからだ。どの競技も優勝できるチームはただ一つだけ。次の県大会や東北大会…と進んでも、頂点に立たない限りはどこかで負けるのである。…いつか訪れる「敗北」の瞬間に「どれくらいの悔しさ」を噛みしめることができるのか?…が、チームの成長のバロメータなのかもしれない。…なぜなら、悔しさは勝つことと真剣に向き合ってきたからこそ湧き上がってくる思いだからである。この悔しさがあるからこそ、また今の自分を前へ前へと推進させる力が生まれてくるような気がする。

昨年度も記したけれど、開会式を含め各会場で繰り広げられる様々な真剣勝負の中で、鮮烈な出会い、息をのむ場面、心ふるわせる瞬間…に必ず遭遇できるのが夏季大会であり、その最大の特徴は、クラス集団、学年集団、そして湊中という集団にとどまらず、他校生、そして対戦相手のチームや観戦している生徒、応援団、係の生徒など、たくさんの「ひと」から学べることである。選手として、あるいは控え選手として、あるいは応援団として、出逢った人たち全てに目を向けてきてほしい!!…**ふと、周りを見たとき、さわやかな印象の人、感動する場面、そういうシーンを探そうと眼を輝かせてほしい!**応援で頑張っている生徒でもいい…会場のゴミを拾っている生徒でもいい…負けても精一杯プレーした生徒でもいい…湊中生…他校の生徒…… etc.そして、目に触れたすべての人たちの中で「さわやか」に感じた「ひと」、「感動した場面」を湊中という集団に持ち帰ってきてほしいと思う。とにかく、勝ち負けの一点に集中するのが、競技大会の常なのかもしれないけれど…、もちろん、それはそれで大切なことだけれど、**もうひとつふくらみを持った見方で見つめることによって「一生懸命」の美しさとか「努力」のすばらしさとか「ひと」の精いっぱいさから受ける「さわやかさ」をみんなで分かち合えるような気がする。…そして、その持ち帰ったすばらしいシーンを、今度は自分のさわやかさにつないでいけたら絶対にひとまわり大きくなるはずだ!!**

話を戻す!…全ての会場で、どの部も「力の限り戦う」はずだけれど、「一生懸命」に戦うことと、「本気で真剣」に戦うことは、似ているようで実は全く違う。どちらも、真面目に手を抜かないで戦うという点では共通している。しかし、「一生懸命」は、困難にめげずに頑張っているみたいな…、我慢してやり抜くみたいな…、その取り組みの過程を評価する意味合いが強い。それに対して、「本気」は真剣な気持ち…、そのありさまで、『失敗したらおしまい』『結果が全て』みたいな…、よりシビアな意味をはらんでいる感じがする。別な言い方をすれば、「一生懸命」という言葉が口にされるととき、そこには、いいわけの要素が見え隠れしていて、結果よりも精一杯に頑張っているところを見てほしいという感覚が捨てきれないから、まだ、余力が残っていて、持っている力を出し切れてない…ような…。それに対して「本気・真剣」には、自分の限界と真価を堂々とさらけ出すような、逃げ場を求めない潔さがあり、「本気」で取り組んだら、どのぐらいの結果が出るか自分自身でも予想できない…みたいな…[自分の経験からも、大きな大会や目標としてきた大会というのは、本当に何が起こるか分からない怖さがあると思う。だからよく『スポーツは筋書きのないドラマ』と言われている。オリンピックで、水泳や陸上競技の選手が自己ベストを更新したり大会記録を出すことも多く、ここの一番の集中力が、自分の潜在能力を引き出してくれたからだと思う。練習試合では勝つためのない相手に勝ってしまうのも本番である。例えば過去のスポーツ記事を調べてみても、前評判の高いチームを食ったゲームはたくさんある。(アトランタオリンピックのサッカー競技で日本がブラジルを破った試合なんかは「マイアミの奇跡」と呼ばれ、サッカーファンはよく知っているのでは…?)] たぶん、限界の境目は、あつてないようなもので、その時、その瞬間だけ届くことのできるある種の「境地」みたいなもの…だと思う。そこに挑むときに、余力を残すことなどできない自分がいるということである。つまり、「一生懸命やったけど、ダメだった」は、**努力を評価してほしいという哀願が心のどっかにあり、「本気に真剣にやったけどダメだった」は、自分の真価はこれ以上でもこれ以下でもないというストレートな結論だけだということになる。**だから、一流のアーティストのパフォーマンスが人々の心をとらえるのは、自分自身をさらけだした「本気」が、感動を呼ぶからだと思う。どんなに一生懸命に歌っても、そこに本気が宿らなければきっと自己陶醉に終わる可能性が高いのだと思う。そういう意味で、夏季大会は「本気の真剣勝負」になるのだ!! 残りの五日間!! 勝負である!!

